

深川木場の歴史と文化 ⑤

木場にまつわる人物と文化財

江東区深川江戸資料館

今号は、江戸時代、風光明媚であった木場に魅せられて、この地に別荘や住居を構えた人、またゆかりの人や今も残る文化財について紹介します。

木場の光景

元禄14年(1701)に造られた「木場」は、江戸中の材木を一手に扱い、材木取引の中心となり活気あふれる場所となりました。その反面、あたり一面は掘割りと貯木(材木)がマッチしたすばらしい風景だったに違いありません。『絵本江戸土産』二編(嘉永3年・1850)深川木場の条に「この辺、材木商の園多きにより名を木場といふ。その園中おほく山水のながめありて風流の地と称せり」とあるように、江戸市中から見れば、一種独特な、別世界に入り込んだような風情(空間)を醸し出していたでしょう。このような水郷的・山水的な木場に、別荘・別邸を建てて、風流を楽しむ人々も生れてきました。

住んだ人々

「成田屋」で有名な歌舞伎役者市川団十郎の別荘が、島田町(現、木場2-11付近)にありました。建てたのは、4代目です。4代目は、宝暦4年(1754)44歳の時、12年間空白だった団十郎の名跡を切望し、2代目団十郎の養子となり4代目を襲名しました。安永5年(1776)66歳で引退。随念と名乗り、深川木場の別荘に隠棲しました。侠客や俳諧仲間との交遊があり、親分肌で人の世話をよくみたことから、親しみを込めて「木場の親玉」と呼ばれ慕われました。また、木場の別荘に門弟を集め「修行講」と呼ぶ演技・型の研究会を開き後進の指導にあたり、歌舞伎の発展に貢献しました。

島田町の別荘は、4代目以来代々の住まいとなり、特に有名な7代目もここに住みました。7代目は、市川家という家の伝統を大きく意識し、初代以来の荒事の当り役を調べ「歌舞伎十八番」を制定しました。天保13年(1842)奢侈を禁じる天保の改革令に違反し、江戸十里四方追放となりましたが、嘉永2年(1849)



浮世絵「木場白猿の居宅二遊ぶ図」 五波亭国貞画 深川図書館蔵

に許され、翌3年に江戸へ戻りました。

また、京の豪商「大丸」の創始者、下村彦右衛門の別荘が木場4丁目にありました。業祖正啓は、享保2年(1717)京都伏見に呉服店「大文字屋」を開業しました。以後、大坂(享保11年)・名古屋(享保13年)に進出し、寛保3年(1743)江戸日本橋大伝馬町3丁目に店を出しました。その後、宝暦7年(1757)木場に別荘を設けました。以来、明治43年(1910)に江戸店を閉めるまでこの木場に存続していました。

ゆかりの人物

木場で活躍した豪商といえば、派手なことで有名な紀伊国屋文左衛門が挙げられます。彼は「紀文」として一般によく知られていますが、生没年は不詳です。

紀文は、初め紀州のみかんを江戸に廻漕し、江戸から塩鮭を上方にもたらして巨利を得たといわれています。貞享年間(1684~88)に江戸に出て、京橋本八丁堀3丁目に材木問屋を開きました。老中柳沢吉保らに取入って、上野寛永寺根本中堂の用材請負に成功して、巨額の富を得、幕府御用達として全盛をきわめました。彼は俳人の宝井其角や絵師の英一蝶ら文人墨客との交流もあり、自身も千山(俳号)と称していました。『近世奇跡考』巻二(山東京伝著・文化元年・1804)には、「紀文追儼図」として豪華な振舞い(遊び)の様子が描

かれています。

しかし、柳沢吉保らが要職から身を引くと、紀文も御用達の特権がなくなり、また火災で材木を焼失したことにより、正徳年間(1711～16)に廃業しました。財を無くしてからは、富岡八幡宮一の鳥居付近(現、門前仲町1丁目)に隠棲して、ここで没しました。墓は、三好1丁目の成等院にあります。



「紀文追儼図」『近世奇跡考』巻二(『日本隨筆大成』より)

「紀文」と並び称されるのが「奈良茂」、江戸中期の材木商**奈良屋茂左衛門**です。奈良茂も謎めいた人物で、出生不明です。日光東照宮の修復工事の請負に絡んで、巨額の富を得たとされています。さらに、江戸の数度の火災によって、商売は隆盛をきわめました。彼は、**大尽舞**(江戸中期から後期にかけ、吉原で流行した一種の囃子舞、幫間が行った。のちには歌謡だけが伝承しました。)の歌の中に「(前略)黒江町に殿を建て目算御殿となぞらえて～」と歌われたように、黒江町(現、永代)に御殿のような家があり、当時は有名であったことがわかります。

奈良茂は何代か存在し、実際に紀文と豪奢を競ったのは、元禄年間(1688～)の4代目にあたります。墓は、資料館の近くの雄松院(白河1丁目)にありましたが、大正12年(1923)の大震災で失われ、過去帳のみが残っています。過去帳には「遷到院樂誉西谷安休居士 六月 神田源七」とあり、正徳4年(1714)6月13日に亡くなっています。

木場生れの戯作者・浮世絵師として、**山東京伝**がいます。京伝は、宝暦11年(1761)深川木場の質屋伊勢屋伝左衛門の長男として生まれました。安永2年(1773)父とともに京橋銀座1丁目へ転居しました。京橋への転居で、通称京屋伝蔵が略され京伝と呼ばれ、そのまま雅号にしたといわれます。浮世絵は、北尾重政に学び、**北尾政演**と号しました。安永7年(1778)18歳で黄表紙『開帳利益札遊合』の挿絵を描きました。同9年(1780)『**娘敵討故郷錦**』を京伝の名で発表し、作者としてデビューしました。『御存商売物』(天明2年・1782)が大田南畝に認められ、出世作となりました。代表作に『江戸生艶気樺燒』(天明5年・1785)があります。洒落本の代表作『仕懸文庫』(寛政3年・1791)が寛政の改革の出版取締令に触れ、手鎖50日の刑を受けました。文化13年(1816)に没し、墓は墨田区の回向院にあります。

特記する材木商として、家名が地名として残った**冬木家**があります。冬木家は、初代直次が承応3年(1654)上州板鼻宿(現、群馬県安中市)から江戸南茅場町にでて材木商を興しました。3代目政郷が、宝永2年

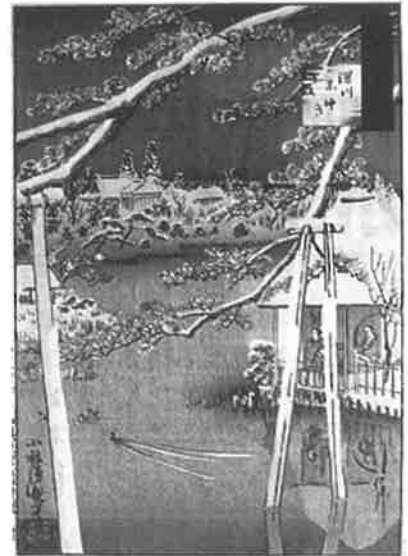
(1705)深川に13,000坪の土地を買い、冬木屋が確立し、この土地を「冬木

町」としました。現在の冬木弁天堂(冬木22)は、元冬木家の邸内にあった私祠でしたが、明治3年(1870)から一般に公開されるようになりました。また、冬木家と言えば尾形光琳が描いた「冬木小袖」(東京国立博物館蔵)が有名です。

文化財

木場2-18に**繁栄稲荷神社**があります。ここは、宝暦7年(1757)に大丸の下村家が木場に別荘を設けて社殿を造り、伏見稲荷の御分霊をまつたのが始まりです。明治43年(1910)別荘を廃した時、社殿は青山の根津家に移り、昭和35年(1960)根津家から大丸へ譲り渡され、旧地の一画へ移築されました。境内には、大丸(下村家)関係者が奉納した、江戸時代の文化財がいくつか残っています。正面の石造鳥居(安政4年・1857)をはじめ、周りの石造燈籠(寛政6年・1794、文政6年・1823)・社殿内の燈明台(文化15年・1818)、鉄造天水桶・扁額(どちらも嘉永7年・1854)等です。これらは、社殿と一緒に根津家へ移されたため震災・戦災を免れ、現在まで残っている貴重な文化財です。

また、木場6-13に**洲崎神社(弁天)**があります。江戸時代ここは海岸の突端にあり、富士山や房総・筑波山が一望できる風光明媚な景勝地で、江戸の著名な行楽地でした。特に、初日の出の参拝地や汐干狩りの場所としては最高で、歌川広重など多くの浮世絵師たちが作品を残しています。神社内には、東京都の有形文化財(歴史資料)に指定されている**波除碑**があります。これは、寛政6年(1794)に幕府が建てた碑です。現状は、200年以上年月が経ているため、ほとんど原状を留めていませんが、歴史を語り継ぐ貴重な文化財です。「波除碑」は区内にもう1基、平久橋西詰橋台地(牡丹3-33)にも現存しています。



「武蔵百景之内 深川ふゆき」小林清親画 深川図書館蔵